

箱根駅伝

2022. 12. 20

箱根駅伝が2週間後に迫ってきた。お正月の2日、3日と何となく見ている年が続いていた。それが、数年前からは、意識して見るようになった。見ようとして見ている自分がいる。

東洋大学の監督が、2009年3月から福島県出身の酒井俊幸監督になった。32歳での監督就任は、箱根駅伝に出場した大学の監督の中では最年少であった。監督就任前には、県内では無名だったいわき総合高校の柏原竜二選手が県大会で見せた積極的な走りに注目し、東洋大学にその情報を伝え、柏原選手を東洋大学入学へと導いている。

あの頃の酒井監督は、最初は選手かと思うほどだった。若い。だが、“山の神”こと柏原選手を中心に、箱根駅伝2連覇に導くなど、東洋大学を箱根駅伝の優勝争い常連校へと躍進させた。箱根の坂での柏原選手は、ものすごかった。前を何人走っていても関係ない状態だった。次から次へと抜いていく。抜かれた選手は「ウソだろ」という表情をしている。

酒井監督の語録として有名なのは、「その1秒をけずりだせ」である。最近であれば、駒澤大学の八木弘明監督の「男だろ」だろうか。酒井監督も柏原選手も八木監督も、みな福島県出身というのがすごい。箱根駅伝に限らず駅伝の世界、長距離の世界での選手、指導者としての福島県勢の活躍には目を見張るものがある。

今でも東洋大学は好きである。応援したくなる。その後、東洋大学と競り合うように青山学院大学が台頭してくる。今では、駅伝と言ったら青学と言われるまでの存在になった。そこには、原晋監督の存在がある。メディアにもよく登場する有名人である。

ここ数年は、八木監督の駒澤大学が浮上してきた。元々が駅伝の強豪校であり、伝統校である。一時の低迷を乗り越え、見事に復活してきた。他にも駅伝に力を入れる関東の大学は多い。最近では、立教大学である。創立150周年に向けて、箱根駅伝に出ることが大学の事業となっている。「立教箱根駅伝2024」である。青山学院大学が伸びてきた経緯と似ている。

強化を図っている大学が多い中で、箱根駅伝の本選に出場し、シード権を獲得することは容易なことではないだろう。今では、箱根駅伝の予選会がテレビ放映されている。過酷である。熾烈な争いである。10位と11位とでは、天と地の差である。まさに、酒井監督のいう「その1秒をけずりだせ」の世界である。

毎回、不思議なのだが、駅伝は何時間もかかる競技であるのに、つつい見てしまう。ちょっとした目を離すと、順位の変動があったり、劇的な展開になったりするから目が離せない。今回も数々のドラマが生まれることだろう。

原監督の「〇〇大作戦」もいいが、八木監督の「男だろ」も聞きたい。酒井監督率いる鉄紺の東洋大学も秘かに狙っているはずである。期待したい。このお正月も、箱根駅伝を柱とした過ごし方となりそうである。